

留学生教育における平和の視点
- 留学生の論じる「日本との関係」と国際理解 -

森玲子

大分大学

広島大学平和科学研究センター客員研究員

**Intercultural Education from a Peace Perspective:
The Historical Perception of International Students and
World Peace**

Reiko MORI

Oita University

Affiliated Researcher, Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

The number of international students is rapidly increasing at Japanese universities in

recent years and more than ninety percent of those students are coming from Asian countries. According to the policy of the Ministry of Education, Science and Culture, the international cooperation and mutual understanding between Japan and foreign countries will be promoted through students' exchange.

However, the international program on campus is still experimental and the international understanding is far from the expectation.

In this paper, I introduce my Japanese Studies classes which have been designed for newcomer international students to give them the basic information about Japan and Japanese society and I try to examine their opinions about the relationship between Japan and their home country. Many of the international students from Asian countries have addressed that the war time experiences are the most symbolic and memorable events between two countries. On the other hand, not many Japanese students are aware of that history of war and its aggression.

Having many international students cannot bring better relationship with other countries, and we all know that we have to make efforts to understand each other. We have to recognize the importance of intercultural understanding and this will be achieved by acknowledging the varied cultural and social background of people and their way of thinking. My conclusion is that the adaptation of a peace perspective in intercultural education is a key to develop the international understanding for us and to live together peacefully in this global world.

はじめに

わが国では、21世紀初頭における10万人の留学生受入れを目指す「留学生受入れ10万人計画」に基づいて、留学生受入れのための施策を総合的に推進してきた。その結果、留学生数は増加傾向にあり、2001（平成13）年5月1日現在では、約79,000人に上っている。その内アジアからの留学生は9割を超えている¹。

文部科学省は、留学生交流の意義を、「留学生を通じた国際交流により、わが国と諸外国の相互理解および国際理解の推進や国際協調の精神の養成等が期待される」²としている。

この小論では、留学生が論じる、留学生の母国と日本との関係を基に、相互理解および国際理解実現のために必要な教育を、平和学習の観点より論じてみたい。

外国人留学生受入れの現状

日本の大学等で学ぶ留学生は、2001年5月1日現在78,812人で、前年に比べ23.1%の大幅な増加を記録した。「21世紀への留学生政策に関する提言」が出された1983（昭和58）年当時は10,428人にすぎず、この18年で7.5倍の増加である³。

しかしそれでも、高等教育機関の在籍者数に占める留学生の割合を諸外国と比較すると、イギリス17.8%、ドイツ10.4%、アメリカ合衆国6.4%等と比べて極端に低い2.2%に留まっている⁴。

また、留学生を出身国別に見てみると、2001年5月1日現在のデータで、中国が44,014人、韓国が14,725人、台湾が4,252人、マレーシアが1,803人となっており、アジア地域の出身者が全体の91.8%を占めている⁵。

本学においては、2001年5月1日現在21カ国から113名の留学生を受け入れている。その内20名が学部生、52名が大学院生、残りが研究生や交換留学による学生などとなっている。出身国別では、中国が43人、韓国が29人、マレー

シアが 19 人など、アジアからの出身者が 87.6%を占めている⁶。

留学生のための日本事情教育

本学では留学生のために、教養科目として「日本事情」を、また短期留学生⁷のための英語による科目として、“Japanese Studies”をそれぞれ開講している。いずれの授業においても、受講生は来日すぐ、もしくは留学 1 年目の学生であるため、この授業では、次のことを目的としている。

「日本の歴史、文化および現代社会に関する基礎的な事柄を学ぶことにより、日本および日本社会・日本人についての一般的理解を深める。また、日本についての理解を深める中で母国との関係についても再考するきっかけとし、さらに国際理解につながるグローバルな視点を養う。」

また、カリキュラムは以下の通りである。

第 1 週	導入
第 2 週 - 第 4 週	日本の歴史の概説
第 5 週	日本文化体験
第 6 週 - 第 8 週	日本文化の概説
第 9 週 - 第 13 週	日本の現代社会についてテーマ別に概説
第 14 週 - 第 15 週	学生の研究発表およびまとめ

第 1 週では、日本への留学は初めてという学生たちの持つ「日本のイメージ」を単語で列挙させている。その結果には、出身国や性別などによる大きな特徴はみられず、次のような単語が上げられた。

歌舞伎・富士山・桜・技術・伝統・親切・トヨタ・SONY・東京・サムライ・相撲・アニメーション・神社・物価高・寿司・サシミ・車

留学生たちが持つ、日本のイメージは、伝統文化と高度経済成長・技術力の両面であり、昔からの文化への関心とともに、電気製品やアニメなどへの知識も備えているといえる。

授業の中では、日本の歴史を概説した後、每期学生たちに次の課題を与えている。「あなたの国と日本のかかわりを述べよ」というテーマで、レポートを書

かせることである（日本語で 2000 字程度、英語で 800 ワード程度）。学生たちが、どういうテーマでいつの時期に関して記述したかについては次に述べるが、出身国により特徴が見られた。

なお、今回対象とした学生は、2001 年秋季および 2002 年春季に、「日本事情」もしくは、「Japanese Studies」を受講した 29 人である。出身国は、中国 10 人、韓国 10 人、マレーシア 4 人、香港 2 人、そしてドイツ、オランダ、イギリス各 1 人であり、性別は、女性 14 人、男性 15 人となっている。マレーシアの 4 人と中国の 1 人は、正規の学部生（工学部）として留学しており、残る 24 人は短期留学生として、1 年間本学で学習している学生である。短期留学生の母国での専攻は、多種多様である。（ビジネス・コンピュータ・教育・法律・文学・観光学・英文学・経営・日本研究等など）しかし、日本での滞在は 1 年間のみであるので、本学での専門科目の学習は限られている。

留学生が論じる「日本との関係」

学生たちのレポートの内容がどのようなものであったか、学生たちが日本との関係をどのように捉えているかを分析してみたい。これには、各国の学生たちが、母国での今までの学習および教育の中で、日本とのかかわりをどのようにとらえているのか、また日本への留学を実現したことに通じる日本への興味・関心がどこにあるのかについても、考えてみることにしよう。なお、記述については、留学生の記述をそのまま記載するため「日本事情」受講生は日本語で、「Japanese Studies」受講生は英語による記述となっている。

まず、中国の学生が日中の関係として捉えた内容は次のようなものであった。

“China and Japan in 7th and 9th Century. China was in the Tang Dynasty. It was the prosperous period of China’s feudal society. During that period, Japanese ambassadors had been to China for many times. Their purpose was to learn Chinese culture and system.”

“At the Taika Reform, Japan copied many things from China. Japanese government

was to be reorganized on the model of Tang.”

“Japan and China ‘s culture have much common.”

“In the ancient times, China was the most powerful and influential country in the world.”

「7世紀から9世紀にかけ、何度も日本の使節が中国に渡った。当時の中国の文化や制度を学び、進んだ政治・法律・文化などを日本に持ち帰った。中国は歴史のある文明古国だ。中国の漢字は日本の文化に大きな影響を及ぼした。」

“Japan achieved industrial progress and built up sufficient military power to defeat China. In the Showa period, Japan waged 8 years military aggression against China which led to 35 million Chinese were killed and survivors suffered a lot.”

中国の学生が、日中の関係として捉えたのは、中国の「唐」を中心とした時代が多く、中国の文化のおよび政治的隆盛と、日本への文化的影響の大きさをあげている。今回対象となった10人の中で、日中戦争について記述した学生は1人であった。

一方、韓国の学生の述べた日韓関係は、中国とは大きく異なっていた。

「日本は、韓国の地理的に必要な部分に大きな鉄杭を打った。すなわち、韓国の民族正気を切るためだった。韓国の精神的なことをすべて抹殺しようとしたので、今でも韓国人の頭の中には『日本人は嫌だ、悪い』と感じているのではないか。」

「韓国の日本文化開放については、賛成と反対の2つに意見に分かれている。反対する人の意見は、『日帝時代を忘れたのか。それは私の国にとって本当に辱めを受けたことだ。そのことを絶対に忘れたらだめだ。その国の文化をなぜ取り入れようとするのだ。』というものだ。」

“In 1592 and 1597 Japan invaded Korea. Korea was annexed by Japan in 1910. Many Korean women were taken for sexual slavery by Japanese troops.”

“Because of the inconvenient relationship in the past, Korean did not feel free to accept Japanese culture even though they were well-developed.”

「日本との持続的な相互関係、また生活・文化の接触がひっきりなしにあったにもかかわらず、今になって日本文化開放に問題を提起したのは、韓国人の心の中で根付いている歴史的問題があるからではないかと考えられる。」

このように韓国の学生 10 人の内 6 人までが、日本の侵略の事実を述べ、そのことに対する韓国の人々の日本への感情について記述している。韓国における学校教育および祖父母などの身内からの話として、若い世代が歴史を継承しているということがうかがえる。

次にマレーシアの学生のレポートを見てみたい。

「マレーシアでは日本語を喋れるお年寄りが多い。日本語の歌さえ上手に歌える人もいる。これは歴史と関係がある。1941 年日本の軍隊はマレーシアへ戦いに来た。学生は全員日本の学校で勉強しないといけないとした。日本に支配された時、たくさんのマレー人が死んだ。小さい間違いをしてもすぐ殺される。」

「1941 年 12 月 8 日、日本の軍隊はマレーシアに入った、41 年から 45 年まで日本はマレーシアを支配した。」

「1941 年 12 月 8 日に日本はマラヤに入りました。日本はマラヤを占領しました。その時マラヤはさらに貧乏になり、お金もなく食べ物も配給制になりました。その影響で、今でも日本が嫌というマレーシア人もいます。」

4 人の学生のうち 3 人が、日本の占領を、マレーシアと日本の関係として述べ

ている。

香港の学生も、第2次世界大戦中の日本の占領について取り上げている。

“On the Christmas of 1941, Hong Kong surrendered to Japanese troops. It put the whole Hong Kong society in plight at that time for three years and eight months. That period is believed to be the most miserable time for Hong Kong people.”

“Manila, the Philippines, Malay Peninsula, Singapore, Indonesia and of course Hong Kong were all captured by Japanese troops. Trade activities stopped and money devalued. To the worst, those Chinese suffered from continuous warfare between China and Japan and fled to Hong Kong were being forced out of the territory of Hong Kong, because of the serious food shortage. These people were mostly the educated and professionals, who were considered beneficial to the growth of Hong Kong.”

アジアからの学生26人のうち、12人が第2次世界大戦中の日本軍の侵攻および侵略によりもたらされた悲惨な人々の生活の様子を詳しく述べ、それから50年以上過ぎた今もなお母国の人々の心に残る影響をレポートに書き記していた。

一方でヨーロッパからの学生3人は、それぞれ次のような日本との関係を論じている。

“A brief comparison between ‘Weimar Republic’ (Germany, 1918-33) and ‘Taisho-Period’ (Japan, 1912-26) and its aftermath as historic context for the democratic development.”ドイツの学生。

“A comparison between Japan’s and England’s history during Japan’s Edo period.”イギリスの学生。

“The trade between the Netherlands and Japan. In 1585, the first Dutchman arrived in Japan.”オランダの学生。

ヨーロッパの学生は、母国と日本が交渉をもった歴史的事実のうち、それぞ

れ関心の深い分野から、テーマを選んでいるといえる。

アジアからの学生の内、中国をのぞいた地域からの学生の多くが、第2次世界大戦中の日本の侵略を、「日本との関係」として取り上げていることについて、重く受け止めなければいけないと感じた。授業の最初の時間に各学生が列挙した「日本のイメージ」に現われた事柄は、日本との関係としてはほとんど登場しなかった。現在の生活の中で考える日本へのイメージは、一方的に日本から受けるものであり、母国との関係もしくはかかわりという言葉と頭の中で結びついていない。一方、戦争中の侵略については、学校での学習を通して、もしくは、身内の実体験を聞くという中で、確実に伝えられていっているのである。レポートのみならず、授業の討論の中で、その本音を述べる学生もいた。例えば、「戦争責任というが、ドイツのヒトラーは死んだけど、日本では天皇制度が存続している。」(韓国の学生)「日本が侵略してきたとき、祖父は逃げるために、財産のお金をほとんど使い切った。」(中国の学生)などの発言があった。留学生にとっては、高度先端技術として接する日本とは別の顔を日本は見せているかのようである。

中国の学生たちのレポートに、戦争および侵略に関する記述があまりないのはどういうことであろうか。学校教育において、中国では、中国自身の歴史や業績を学習することで、自国のすばらしさを教えているように見える。特に唐時代については、中国人にとっても特別な思い出があるとのことであった。そのため、日本が中国から多くを受け取っていた7世紀から9世紀にかけての関係の記述が多かった。中には、日本が中国をはじめいろいろな国をコピーし続けているという批判的な見方を述べる学生もいた。また、経済発展の先輩としての日本への関心はどの学生も大変強く、中国の発展を手放しで喜び、公害や自然破壊、また台湾やチベットとの関係をめぐる人権問題などについての議論には授業中でも消極的であった。

日本人学生の考える「日本と各国の関係」

一方日本の学生たちは、留学生の母国と日本関係をどのように見ているの

であろうか。

本学においては、現在7カ国17校と学生交流協定を締結して、日本人学生を派遣している。平成9年から13年までの5年間においては、欧米への派遣が22人に対してアジア地域へはわずか2名であった。しかしながら、14年度は、中国および韓国へ10名近くが留学している。また、留学生の生活支援を行うチューターの役割を希望する学生の中にも、中国や韓国からの学生のチューターになりたいという日本人学生が増えている。このように、日本人学生の関心も、従来の欧米中心から、韓国を始めとして中国や他のアジア諸国にも、向けられているといえる。

しかしながら、留学生が述べた、第2次世界大戦中の日本のアジア諸国とのかわりについての知識は、まだまだ乏しいのが現実である。韓国や中国で何が起きたかについて知っている学生も決して多くはなく、ましてや、マレー半島や太平洋の島々にまで、日本軍が進んでいたことを知る日本人学生は少ない。韓国の料理や音楽、中国の美容商品などを知っていても、日本とアジア諸国の歴史を知らない学生が多いようである。

これは、歴史教育だけの問題ではもちろんない。経済的豊かさを求め、欧米諸国に追いつき追い越せと突っ走ってきた日本社会自体が、アジアをどのように見てきたか、いやあまり見てこなかったということの反映でもあると思うのである。

国際理解のための平和の視点

前述したように、日本は国をあげて留学生数の増加を目指しており、文部科学省も「留学生を通じた国際交流により、わが国と諸外国の相互理解および国際理解の推進や国際協調の精神の養成等が期待される」と、留学生交流の意義を強調している。

留学生本人にとっては、留学による日本の高等教育機関における学習が、本人の知識および技術となり、その後の本人の職業を通して、留学生の母国の発展に寄与できるということが、第一義的目的であることは違いない。

では、日本と留学生の母国とのそして日本人学生と留学生との「相互理解および国際理解」を推進するためには何が必要なのでしょうか。

まずは、お互いを知るために、留学生と日本人学生と一緒に、歴史・文化や経済など様々なテーマについて学習し討論する場を設定することではないだろうか。学部や大学院に在学している留学生の中には、日本語が充分ではないとか学業が忙しいなどの理由から、日本人の友人がほとんどいないという学生も少なくない。また、同じ国の出身者同志の助け合いに比べると、他の国からの留学生との交流もさほど進んでいない。大学では、留学生の日常生活の世話役として「チューター制度」を持つところも多い。一人の留学生に一人の日本人学生がチューターとしてつくことで、話相手になったり、授業のとり方や聞き逃した点を一緒に復習するなどの、効果的な関係を築いているケースもある。

現在、いくつかの国立大学および私立大学で行われている「短期留学プログラム」では、日本人学生と留学生の合同受講による講座がいくつも開講されている。本学においても、来年度より本格的に実施が決まった。「異文化理解」などの科目で、考え方や歴史観の相違および類似点について、じっくり話しあい、お互いを理解することが講座の主目的となるものである。歴史認識についても話し合うことが必要であろう。ある出来事に関して、いくつかの見方が存在するのであれば、それらをすべて出し合うことなくして、理解はありえない。これらのことを実現するために、共に学ぶ機会が重要であると思われる。

次に、お互いを理解することに留まらず、現実の国際社会情勢を正しく認識し、グローバル化の進んだこの地球にともに生きる人間として、国際理解のための学習が必要であると思う。その基本となるのが、平和を求める視点ではないだろうか。宗教や民族および政治的理念の対立から、世界中で紛争が絶え間なく続いている。考え方の違いを知り、お互いを認め合い、問題は話し合いにより解決できるということを学習してほしい。

また、平和とは、単に戦争のない状態ではない。戦争以外の平和を脅かす要因となる、貧困・人権侵害・暴力などの、原因を考え、どのように解決するか、またなくしていくかについて、積極的な議論を行うことが求められている。学生たちは母国の経済発展および社会情勢の違いにより、同じ出発点に立って、

今後の地球および国際社会を見るのが決して容易とはいえない状況にいると思う。経済がすでに発展し、人々の暮らしが安定している国が、経済発展の途上にある国に対して、環境破壊の要因として、工場などの排気の規制を押し付けることには学生たちからも反発がある。しかし、次世代を担う若い学生たちの価値観の中に、自国の発展だけでなく、地球全体の平和を願うという考え方があるかないかは、近い将来の政策決定において、重要な鍵となるのではないか。グローバル・ビレッジに住む村人としての、連帯感を培って欲しいものである。

2002年度秋季の日本事情の授業において、ここに述べた国際理解および平和の視点導入の実践を試みた。韓国5名・中国2名・マレーシア3名の留学生が受講したこのクラスにおいて、まず3～4人程度のグループを作り、家族・学校など身近なテーマについての話合いの場を持った。日本の社会一般については、すでに春季で学習済みである。同じアジアの一員であるにも関わらず、お互い知らないことばかりであったようだ。同じ学部であるにも関わらず話をしたこともない学生もあった。社会習慣や文化の違いが数多く話合われた。その後、日本人学生を呼んで、各国の文化や社会について発表と質疑応答を行い、日本を含めた4ヶ国の「異文化」理解を試みた。「近い国なのに案外知らないことが多かった。」「家族への考え方など、似ている点もあった。」等など、多くの発見と理解があった。また、学生のグループでの話合いの中で特に関心の高かった、韓国の徴兵制やマレーシアのイスラム教などについても、改めてクラスで議論を行った。イスラム教について説明したマレーシアの女子学生は、2001年9月のテロ事件以降、着ている服装からイスラム教とわかって嫌がらせを受けたこともあったと打ち明け、もっと多くの人と話あいたいと感想を述べていた。こどもの時からイスラム教の中ですごしてきた彼らの考え方や生き方に、韓国や中国、日本の学生たちも耳を傾けていた。また、韓国の男子学生は自らの徴兵経験として、その訓練の厳しさを話すとともに、北朝鮮の現在の状況も含め改めてアジア地域の平和とは何かを深く考えたと言っていた。また、中国の学生に対して、北朝鮮と中国の関係への意見を求めていたが、中国の学生は、あまり関心がないようであった。

クラスでの話あいは、近年のイラクを巡る世界の動きにも及んだ。祖父母や親戚の人の戦争での悲惨な体験を知る学生もいたが、自分自身の戦争や戦いの経験は誰一人として持たない。それゆえに戦いという問題解決手段を、学生たちは歓迎していなかった。4ヶ月15回の講義の中で、どれだけ学生たちが考え理解できたかは、わからない。しかしながら、新しく出身国の違う友達も増え、平和や世界について考えるきっかけとなったのでは思っているところである。

終わりに

国際化を模索している日本にとって、留学生10万人受入れというのはひとつの指標になりえた政策であると思う。物価の高い日本に留学生を受け入れるために、奨学金を始めとしてかなりの予算がつかぎ込まれている。しかし、単なる数の増加が、本来目指すような、相互理解や国際理解・国際協調をすぐに生み出すものではないということは、明白である。大学同志の交換留学が単に日本語を学ぶためだけの日本語専門学校化したり、学生ビザ取得が不法就労へつながったりといくつかの問題点がすでに指摘されているところである。

異文化のもとで生活および学習する留学生にとっても、また異文化を背負った留学生を受け入れる日本の大学および日本人学生にとっても、お互いを理解することを通して、得るものは決して少なくない。その効果を最大限に活かすためにも、歴史や文化への適格な視点はずすことはできないと思う。現時点においては、留学生と日本人学生の歴史観には、かなりの開きがあると実感する。その点を認識することなしには相互理解には程遠い。過去の過ちを二度とくりかえさないためにも、何が平和であるかを、じっくりと話し合う時間が必要であると思う。そして、平和実現のために何ができるのかを、考えて欲しいと思う。大学としても、その実現にむけての努力が必要であろう。

そこを出発点として、21世紀のグローバル化した世界を担う若い力として、平和を求める視点を持ってほしいと願うのである。

註

1 文部科学省高等教育局留学生課「我が国の留学生制度の概要 - 受入れおよび派遣」(平成14年5月発行)7 - 8 ページ。本概要によると、外国人留学生とは、我が国の大学、大学院、短期大学などで教育を受ける外国人学生で、「出入国管理および難民認定法」別表1に定める「留学」の在留資格により在留する者を言う。

2 同上3 ページ。

3 同上7 ページ。

4 同上4 ページ。

5 同上8 ページ。

6 「大分大学概要」2001年版33 ページ。

7 「短期留学」とは、主として大学間交流協定等に基づいて母国の大学に在籍しつつ、必ずしも学位取得を目的とせず、他国の大学等における学習、異文化体験、語学の習得などを目的として、概ね1学年以内の1学期又は複数学期、教育を受けて単位を修得し、又は研究指導を受けるものであり、その授業は母国語又は外国語で行われる。文部科学省高等教育局留学生課「我が国の留学生制度の概要 - 受入れおよび派遣」(平成14年5月発行)34 ページ。